

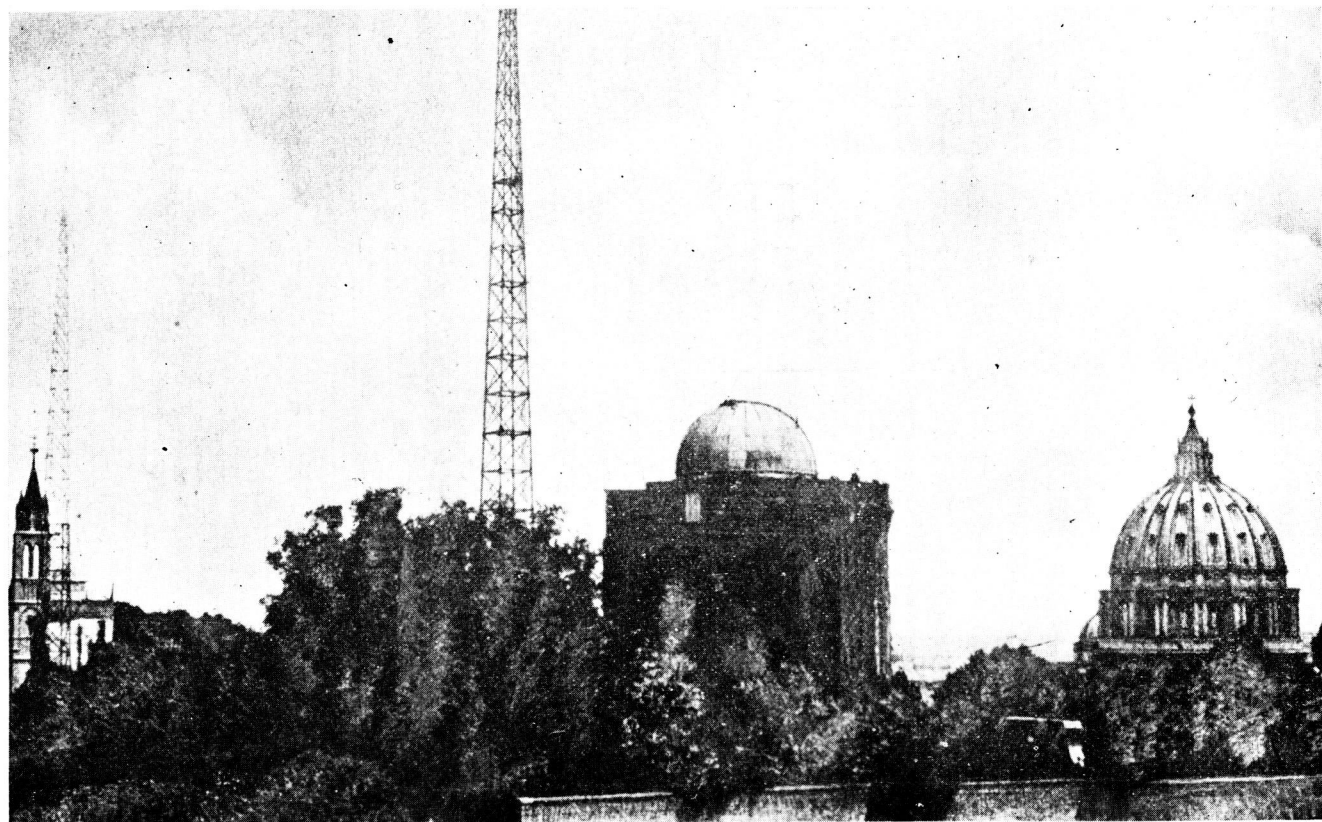
星 星 星 星 星 星 星 星 星 星 星

8 月

ローマ法王廟のチカン天文臺の

『科學と宗教との鬭爭』などと言はれて、遠くはコペルニクやガリレオの時代から、近くはマルキシズムのロシア革命に至るまで、キリスト教と近代理學とが仲の悪い標本のやうに言はれもし、又、思はれもしてゐるのに、之れは又、不思議千万にも、キリスト教の大本山であるローマ法王のプチカン宮殿には、堂々たる天文臺があつて、第一流の天文學者たちが、朝には聖像を拜し、夕には天體觀察をしてゐるのだから面白い。

元來、キリスト教の僧俗たちは、其の教義から言つても、其の趣味から言つても、理學（サイエンス）殊に天文學には決して冷淡ではないのであつて、新曆を制定したグレゴリ第十三世法王や、地動説の主唱者コペルニク等が聖職の人々であると言ふまでもなく、近年の學者の中にも宗教界の雄者が少なくない。又此の人々は積極的に天文學研究をやつてゐるのであつて、現に我が國から言へば御隣りの支那上海の郊外 Zose（余山）にもカトリク教立の天文臺があり、又、フィリピン島のマニラの天文氣象臺や、濠洲リヅビーウ River-view の天文臺や、米國ではワシントン府のジョジタウン天文臺や、加洲サンタ・クララの天文臺、南米ではチリ國サンチアゴのカトリク大學大文臺、英國ではストーニ・ハースト學院天文臺、オランダ國ではファルケンブルグのイグナチウス學院天文臺、スペイン國ではエブロ河畔トリトサの天文臺、佛國ではブルジェの天文臺、——此等の天文臺が悉く天主教によつて創立され、計畫されて、學界にも重きをなしてゐるばかりでなく、此等の全世界にわたる宗教立の天文臺の牛耳を取つて、ロマ法王廳の一角をなす「ヴチカン天文臺」こそは、歐洲天文學界に



ワチカン天文臺全景

於いても偉大なる存在の一つである。

ヴチカン天文臺は本名を SPECOLA VATICANA といひ、ロマ市外テゼレ河畔西岸の法王領内に、サンピエトロ大寺院と肩を比べて建てられてゐる。丁度此所あたりは、法王廳を圍む大城壁に沿つた一角であつて、創立は今から三百五十年前、例の新歴制定で有名なグレゴリ第十三世法王の御聲がかりだといふ。尤も、しかし、其んな昔しの天文臺の面影を今日持つてゐるわけではない。

今のヴチカン天文臺建築は1890年頃に出来たもので、大小幾つかのモデルンなドームの中に、口径33センチの天體寫眞望遠鏡と、徑41センチのメルツ製赤道儀と、徑10センチの小赤道儀などを有し、其の他、廣い圖書室と研究室と奥ゆかしい談話室とがあり、最近には又、立派な無線通信室と其れに相應しい大アンテナが建てられて、道行く人の目を惹いてゐる。

臺長は、ハイゲン J. G. Hagen 師。其の配下にエマヌエリ師が居り、又名譽臺員として、スタイン師とエシュ師とがある。皆、墨染の僧服を着て、研究を勵んでゐる。

ハイゲン師は、米國ジョウジタウン天文臺長をしてゐたこともあつて、英佛獨の三外國語にも精通し、早くから變光星研究のオトリチイとして推され、近年は又、天空にひろがる暗黒星霧の研究をしてゐる。齡八十五才を越して、尙ほ壯者をしのぐ勢力である。

こゝに掲げる寫眞は、ヴチカン天文臺の近狀を撮影したものである。右の尖塔はサンピエトロの大堂宇、中央に近いドームは41センチ大望遠鏡室である。33センチのドームはサンピエトロ寺の左蔭にわづかに片影を現はしてゐる。寫眞の左半には天空に聳える無線アンテナがある。之れは最近の架設であつて、寫眞全體の學術的乃至思想的コントラストを興味深くさせてゐる。

あの41センチ望遠鏡の大ドームの圓い屋根の頂上まで、エマヌエリ師に導かれて、山本英子夫人は攀ぢ登つて、日本婦人の意氣を見せたことがある。1925年一月二十二日午後四時頃のことであつた。（「天界」第59號 第479頁を見られよ）